21.　「林鐘吉」とはどんな人物か

問　広瀬橋の橋供養碑を建てた林鐘吉（はやしかねきち）とは、どんな人物ですか。

答　広瀬橋南阿元、即ち長町側堤防上手にその橋供養碑が建っており、次のような文字が刻まれています。

文政六歳次癸未 (1)　(2)　(3) 橋　供　養 林鐘吉祥烏

〔碑高約1.8 *m*〕

傍に、昔の木橋時代の橋脚の礎石１個が置かれ、新しい小祠が建立されており、次の標示板が建っています。

旧永町橋の 礎石 橋姫神社 昭和五十七年六月三十日 寄贈　南部家

碑文の問題の個所『林鐘吉祥烏』は「林鐘吉」などと読むべきでなく、「りんしょうきっしょう〔きちじょう〕う」と読みます。「林鐘」とは旧暦６月の異称、「吉祥」とはめでたいこと、ここでは吉日とか吉辰(4)と同じ意味で使ったもの、「烏」は焉に同じで、語の終りに添えて断定の意を表わす助辞であります。従って「林鐘吉」などという建立者の名とするなどは、甚しい誤まりであります。

この橋供養碑について「広瀬川の歴史と伝説」（三原良吉）の中に、次の記事があります。

『藩政時代の長町橋(5)は今の広瀬橋のやや上流にあった。長町側にその跡が残っている。当町は橋を渡ってからカギの手に折れて長町(6)の通りに出た。昔、初めて橋をかける時、通りかかった巡礼の女を生き埋めにして人柱(7)にしたといい伝え、橋の南側阿元（あもと）西側の南部屋というソバ屋の庭に川に面して橋姫供養碑が立っている。橋は明治時代列柱橋ケタ式橋と変わって広瀬橋(8)と改めた。昔は木場連といって木場に住み長町の駅伝馬を扱っていた馬方たちが殊勝にときどき橋供養をした』

また『橋供養碑(長町観音堂所在地)　もと農業高校〔現仙台南高〕の在った所は今も木場（きば）という地名が残っている通り、昔藩の流し木蔵(9)のあった所である。この付近に奥州街道の宿場長町で働いていた駅伝馬や馬方（うまかた）や駕籠かきの人々が集団居住しそれを木場連（れん）と称した。広瀬橋は長町橋と

いって奥州街道の城下入り口の大事な橋であったが洪水で時々流失した。木場連はその度び毎に心を痛めて流失した橋のため供養を行い碑を建てた。その一つが仙台巡礼札所の三十二番長町観音[10]の境内に残っている。』この供養碑が道路の拡張整備区域に入ったため、南部屋主人の特志により昭和57年6月現在地に移されたのであります。[11]

注(1)　1823 年。[12]

注(2)　歳星〔太歳ともいい木星のこと〕。年まわり。歳星のやどり。歳星が12次〔子・丑・寅・卯・辰・巳・午・未・申・酉・戌・亥〕のどれかに宿ること。木星は1年に1次〔12次の1〕ずつめぐり、12年で1周する。

注(3)　みずのとひつじ

注(4)　吉祥の用例〔橋供養についても〕。「義山公治家記録」巻之7、慶安2年〔1649〕6月9日の条

『○九日丁酉。仙台御城下大橋成就ス。今日未明ヨリ竜宝寺法印実雄出ラレ、橋供養アリ。瑞岩寺前住雲居和尚銘ヲ作ラル。

銘曰、

左右欄梁横緑水　東西柱礎徹黄泉

山川増瑞仙台境　貴賤往来万々年

順　賢太守忠宗公之厳命作此頌以賀之

慶安二年林鐘吉辰　雲居叟希膺

奉行　梅田彦右衛門吉成

大明恒一書』〔P・351に既出〕

注(5)　長町橋がいつ架橋されたかの史料はなく、寛文8・9年〔1668・69〕絵図から漸く現われる。

注(6)　長町の取立は慶長17年〔1612〕のことである。その史料に「長町検断肝煎連署申上状写」〔「政宗君治家記録引証記」の内。仙台市史資料 256〕がある。

『長町より申上候之事

一　長町相立申候は、金森隠岐守ヲ以、津田豊前守殿御取立ニ而、慶長十七年極月より相立申候、但御町屋敷ハ八十六間ニ而御傳馬を仕申候か、御百姓なみ之御役仕申候間、相つふれ申候、唯今ハ馬数三十五疋ニ而御傳馬仕由候所、皆々相つふれ申候、

一　中田町、まし田町なみの御傳馬ハ、壹月ニ付而、五百疋六百文相立申候、

右之外

一　茂庭とをり、　一〔こ〕すかうとをり

一　在々より罷出申候から竹、しの竹、此荷物當三ケ月(ママ)ト二千百廿三駄、但、奉行はなすの武助切手有り、

一　天水悪田之村ニ御座候間、相つふれ申候間、如形ニ申上候、依如件、

元和九年

四月七日

長町検断

九郎右衛門印判

孫　　惣同

新　兵　衛同

肝煎

五郎右衛門印判
(三カ)
與之右衛門同　』

長町のうち北長町は根岸村分、南長町は平岡村分であった。ところが、伝馬役のほか百姓並の御役〔雑税〕を勤めさせられたため、過重な負担に堪えかねて、つぶれる者が続出し、上掲史料にもある通り、元和9年〔1623〕『皆々相つふれ申候』という状況になってしまった。そこで、「名取郡誌」に『万治二年〔1659〕綱村、根岸枚岡二村の民各五十八戸を移して長町駅となし三石五斗宛を与へて駅逓の役に当らしむ。』とあるのは、長町宿の再整備を示すものである。

注(7)　「民俗の事典」（大間知篤三等編）に『わが国には水に関する伝説のうち、橋にまつわる話は非常に多く、わけても人柱伝説は著名である。古くから橋のたもとには橋の神をまつり、女神で愛憎のはげしい神とされていた。そのうえ橋は峠とともにひとつの境で、そうしたところからも民俗上重要な位置を占め、伝説の発生にも力を添えている。……橋の工事のむずかしさのために、人柱のような神秘な伝説が多く残されている。橋のたもとには、橋姫などというねたみ深い女神もまつられた。』

「日本民俗事典」（大塚民俗学会編）に『急流短水を特色とする日本の川に橋を架けるには……人柱を伴う伝説も伝えられている　……人柱　人を生きながら埋めて堤や橋や城などの工事をしあげたという伝説。人間の生命とひきかえに工事の完成をはかるということが実際にわが国で行なわれたとは考えられない。しかし、古く「日本書紀」の仁徳天皇の条には、武蔵の強頸と河内の茨田衫子という者が河内の茨田堤を築くための人柱に立てられたと記されている。「神道集」の橋姫明神の縁起によると、白い布で袴の破れをつくろった者が摂津の長柄橋を作るための人柱に、そのような身なりの人を立てよとすすめて、かえってみずからの死を招いたという説話が「ものいへば長柄の橋の橋柱鳴かずば雉のとられざらまし」という歌とともに伝えられる。そのほか、経ケ島における松王健児の人柱、掃部長者にかかわる佐用姫の人柱など、多くの類例を挙げることができる。盲僧や六部や巡礼などがしばしば水神の犠牲として死んだと伝えられるのは、

遊行〔ゆぎょう〕教家がそのような伝説の流伝にあずかったためであろう。また、子供をつれた女が自ら人柱に立ってともに神にまつられたというのは、水神をまつる巫女〔ふじょ。みこ〕が母子神(ぼししん)の信仰にもかかわったためとみられる。いずれにせよ、さまざまな遊行者の活動によって恐ろしい人柱の伝説が次第に各地におちついて、あたかも事実のように信ぜられたのである。』

注(8) 「仙台市史」第3巻に『仙台と長町を結ぶ広瀬橋は我国最初の鉄筋コンクリート橋として記念すべきである。此橋は長町橋というて在来木橋であったが明治二十二年洪水で流失したので橋台を煉瓦造とし、木鉄のハウトラス式の橋桁をかけたが、腐朽するに及んで改良の議が起った。鉄橋架設の案もあったが当時外国から技術が伝わったばかりの鉄筋コンクリート造とすることに決し、明治四十二年十一月に竣工した。長さ四百二十尺、幅三十四尺、桁式構造で鉄柵の勾欄をつけたものである。鋼材は枝光製鉄所から、セメントは北海道セメント株式会社から採り施工し、工費は七万五千円であった。東京帝国大学工科大学教授広井勇博士の指導により宮城県技師杉野茂吉、技手大窪菊二郎、西沢滝三郎の設計監督によった。落成前の九月には、宮城県へ御来臨の有栖川宮が自動車で此橋を渡られたのも記念すべきことであった。仙台に自動車が表われたのは此時が最初であったと思う。』また、「仙台市史続編」第1巻に『広瀬橋　国道四号線を北上して旧仙台市内にはいる境にある。昔は旅立ちするさい、ここで別れを惜しんだといわれ、近くに旅立明神社や古くからの茶屋がある。伊達藩時代には今の橋から10メートルほど上流にあり、木橋で長町橋と名づけられていたという。現在の前の橋は鉄筋コンクリートのT桁橋であった。橋長127メートル。橋幅10.3メートルで両側には当時としては珍しい歩道がつくられてあった。工事費七万五千円で明治四十二年（1905）十一月に完工、わが国の鉄筋コンクリート桁橋の先駆をなした記念すべき橋だったが、大型重量化する車輛の荷重に耐えかねるようになったので、昭和三十四年工費二億五千万円でかけ換えられた。それまで上流に並んでかけられてあった市営電車専用鋼橋は、そのとき橋の中央に復(×)〔複〕線の軌道として入れられた。〔市電廃止により撤去〕。橋長126.7メートル、橋幅22メートルの鋼桁橋である。』

注(9) P.319の「雪車出しとは」参照。

注(10) 記録に残る分だけでも、享保6年〔1721〕閏7月2日、同16年〔1731〕8月28日、延享4年〔1747〕7月9日に流失または破壊があった。

注(11) P.255の注(13)参照。

注(12) 「河原町と南材木町周辺の民俗」（仙台市歴史民俗資料館。昭和58）に次の記事がある。

『広瀬橋

㋐ 変遷　長町・河原町間に初めて橋が架けられたのは寛文8年（1668年）のことで、

藩の事業として大橋（慶長6年（1601年）完成）に次ぐ、仙台藩2番目の橋として完成した。明治42年11月、鉄筋コンクリート・ケタ式橋が永町橋のやや下流に新築され、広瀬橋と命名された。この橋は東京帝国大学教授広井博士により設計され、宮城県技師杉野茂吉氏が監督し、当時の金額で7万5千円をかけて建築された。新橋は全長420尺、幅34尺で車道と歩道に分かれており、当時としては非常に近代的な橋であった。完成の際には、祖父母・父母・息子夫婦の3代の夫婦により、渡り初めが行われた。広瀬橋の完成後もしばらくの間永町橋は残り、新橋と併用された。その後永町橋は取り壊されたが、数年前まで橋脚が残っていた。なお、礎石は現在も広瀬橋の長町側に保存されている。現在の広瀬橋は全長126.7メートル、幅22メートルで、昭和34年に2億43百万円の経費をかけて完成したものである。

㋑　人柱伝説　水利土木に関して人を犠牲にして埋めたという人柱伝説は全国に分布しており、特に女性が自ら進んで人柱（橋姫）となったという例が多く見られる。広瀬橋についても、次のような人柱伝説が伝えられている。江戸時代、この地に初めて橋を架けるよう藩から命令が下された頃、仙台は長雨続きで広瀬川は氾濫し、橋を架けようにも架けられない状態であった。これは水神様のお怒りであるとして、誰言うとなく人柱を立てようということになった。当時人柱となる人物は、未婚の女性で信仰心の篤い人が望ましいとされていた。そこで当時、長町（百代の里）の指導者であった根岸の長者の一人娘、愛姫が自ら人柱になると申し出た。彼女はオカンノンドウ（十八夜観世音）を管理しており、大変信仰心の篤い人であった。人柱となるために、彼女はまず幾日か断食を行った。これにより神がかりとなった彼女をガンバコに入れ、頭を北東（川下）に向けて丑三つ時に埋めた。彼女は土の中で「南無大慈大師〔悲〕観世音菩薩」と声を出して祈り、人々も声を合わせて祈った。明け方頃に愛姫は息絶え、人柱となった。すると川に光が射し、広瀬川の水が黄金の龍になって昇天した。その後水は引き、広瀬川には橋が架けられた。

㋒　橋供養　永町架橋の際、人柱となったといわれる愛姫は橋姫として、現在も供養が続けられている。橋姫は橋及び土木の神として信仰されたが、かつては長町の木場人夫、馬方の信仰が特に篤かったという。また長旅に出る人にもよく拝まれた。橋姫を祀る祠と橋供養碑は文政6年（1823年）に建立され、広瀬橋の長町側の南部信康氏（南部そば屋）の庭にあった。昭和57年、広瀬橋長町側に新道が開通し、南部家は移転した。橋姫の祠と橋供養碑は、元の場所から北側に数メートル移動させて、今も供養が行われている。』

資料　大漢和辞典（諸橋轍次）